研究ノート

姉崎正治年譜・関係資料目録補遺
― 日仏会館関連事項 ―

高橋　原

解題

以下のリストは，磯前順一・深澤英隆編『近代日本における知識人と宗教―姉崎正治の軌跡』（東京堂出版，2002年）に所収の，磯前・深澤・高橋「姉崎正治年譜」および，磯前・深澤・高橋・鈴木健郎・宮崎賢太郎・A. Zambarbieri「姉崎正治関係資料目録」の補遺である。日仏会館創設をめぐる動きが主たる内容であり，情報源は『渋沢栄一伝記資料』第36巻第12款「財団法人日仏会館」である。

日仏会館は，1919年にリヨン大学のポール・ジュバン総長，モーリス・クーラン教授が渋沢栄一を訪問して以来計画が進み，1924年に財団法人として設立された，日仏の文化交流のための団体である。姉崎正治は創立委員に加わり，評議員，常務理事に就任している。姉崎は1907年に，フランス人銀行家アルベール・カーンがパリ大学に寄付した世界周遊資金によって一年間の外遊を行ない(1)，1919年にはコレージュ・ド・フランスで特別講座ミシオニ講義（Quelques pages de l'histoire religieuse du Japon）を担当するなど，フランスと縁が深かったためであると想像される。

以下の記述によって，渋沢栄一の周辺で様々な国際親善事業に従事していた姉崎の活動の一端が知られる。渋沢，増田明六はともに帰一協会の会員である。また，姉崎と他の理事との衝突が見て取れるが，人間・姉崎正治を理解するうえでは興味深い。姉崎の自伝『わが生涯』には，姉崎が筋を通そうとするあまり，しばしば人間関係に摩擦を生じた様子が描かれており，東京大学宗教学研究室所蔵姉崎正治関係資料にも，そうした姿を裏付ける資料が何点か含まれている。機会があれば稿を改めて紹介したい。

註

(1) 杉山直治郎「アルベール・カーン氏の追憶」『日仏文化』新第八輯，1942年。その時の紀行文が『花つみ日記』（博文館，1909年）である。

1.　姉崎正治年譜補遺

1921（大正10）年

6月3日，渋沢栄一らと日仏会館設立に関して協議（於丸ノ内銀行倶楽部）。

1923（大正12）年

4月8日，渋沢栄一，加藤友三郎首相らの列席する日仏会館設立に関する協議会に出席（於首

相官邸)。

12 月 8 日，日仏会館設立に関する協議会に出席（於丸ノ内銀行倶楽部)。

1924（大正 13）年

1 月，日仏の文化交流を目的とする日仏会館設立趣意書が発表され，創立委員一八名のうちの一人に名を連ねる。

3 月 18 日，日仏会館創立委員会が開かれ，評議員並びに常務理事となる。

12 月 14 日，日仏会館開館式。

1927（昭和 2）年

12 月 30 日，日仏会館有志理事相談会に出席（於日仏会館)。

1928（昭和 3）年

1 月 16 日，日仏会館理事会に出席，敷地購入に当たる地所撰定委員となる（於渋沢事務所)。

2. 姉崎正治関係資料目録補遺—書簡目録

(a) 渋沢栄一

1919.2.21 姉崎宛 （『渋沢栄一伝記資料』別巻 3 46-47 頁）

同日開催の帰一協会例会を体調不良で欠席したこと，姉崎夫人を自ら劇場に案内することができなくなり，親戚に任せたこと，3 月 17 日の姉崎の渡仏とデューイ歓迎をかねたパーティの手配をよろしく頼むという内容。追伸にギューリックの意見書について大問題であると言及あり。

1924.7.19 姉崎宛 （『同上』47 頁）

田中晴川による帰一協会例会の講演「孔老釈三教の一致」の印刷頒布依頼が同氏よりあったことを記し，手配を依頼する内容

1928.4.24 姉崎発 （『渋沢栄一伝記資料』第 36 巻 336 頁）

財団法人日仏会館理事として推挙されて以来学務方面の責任を負ってきたが，公職の本務が多忙で責任を果たせなくなり，会館事業一新の必要から辞任を申し出るという内容

1928.5.8 姉崎発 （『同上』337-338 頁）

辞表提出にも関わらず，4 月 28 日付で日仏会館常務理事に再任されたことへの遺憾を述べ，再度辞任の意がかたいことを表明する内容

1928.9.22 姉崎宛 （『同上』338 頁）

姉崎が日仏会館理事辞任を希望したのに対して，病臥中のために返事が遅れたことをわびつつ，老人を援助すると思ってとどまってくれと慰留する内容。〔注・結局，同時期に辞任を申し出た白仁武，服部金太郎とともに姉崎は留任〕。

年次不詳.8.1 姉崎宛 （『渋沢栄一伝記資料』別巻 3 47-48 頁）

「恒人団の一書」を持参した田中隆なる人物を，自分では相手をしかねるので姉崎に紹介したいことを記す。

(b) 増田明六

1928.4.25 姉崎発 （『渋沢栄一伝記資料』第 36 巻 336-337 頁）

4 月 24 日付渋沢宛と同内容の辞任書を同封し，日仏会館の会合で自分の辞任を披露しても

らいたいと依頼。またシルヴァン・レヴィの仏教辞典編纂事業における使用者に対する会館側の待遇に不満があると述べる

1928.4.28 姉崎発 (『同上』337 頁)

日仏会館の文化事業不振を刷新するため，理事の半数を改選すべきであるが，それが無理でも自分だけは何としても退任する決意を述べ，また同常務理事の木島孝蔵が一向にその責任を感じていないと不満を述べる

1928.6.9 姉崎宛 (『渋沢栄一伝記資料』第 46 巻 692 頁)

日本宗教大会寄付金についての事務連絡

1928.9.23 姉崎発 (『渋沢栄一伝記資料』第 36 巻 338 頁)

渋沢から日仏会館理事を続けるよう慰留されたのを受け，辞任の意向に変わりはないが，折を改めて話をしたいと述べる。